

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

(MS Word)

【氏名】井本佐保里

【所属】(助成決定時) 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻

【研究題目】居住環境の変遷からみ難民キャンプにおける長期居住成立要因に関する研究

## 【研究の目的】(400字程度)

本研究では、現役の難民キャンプであるカクマキャンプおよび、カクマキャンプ設立以前に一時的な難民受け入れ地区として機能していたロキチヨギオの2つの地域について、その役割について明らかにすることを目的として調査を行った。まず、研究対象のひとつであるケニアのカクマキャンプは、1992年に設立された主に南スーダンやソマリアからの難民を受け入れるための難民キャンプである。本研究では、カクマキャンプの中で設立時期の異なる2つの地区の居住者を対象に、どのようにして難民キャンプ到着から現在に至るまで、居住環境を自ら整えてきたのか、という点について明らかにすることで、難民キャンプにおいて一般化しつつある「長期居住」を支える資源について明らかにする。次に、ロキチヨギオについては、難民受け入れの拠点となり多くの国際機関の活動拠点となった1990年代後半から2006年頃に撤退し、また現在に至るまでの変化を把握する。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

調査1：カクマキャンプでの調査(2018年度)

ケニア共和国・カクマキャンプのカクマ1(1992年設立)、カクマ4(2014年設立)の2つの地区を対象に、計17世帯に対してキャンプ内での居住歴と、家屋の建て替えなどの居住環境整備の実態についてインタビュー調査および実測調査より明らかにした。調査では、家族構成、居住歴、敷地境界の変化、家屋の建設時期や方法について居住開始時から現在に至るまでの変化について明らかにした。また敷地内の実測を行い、居住開始からの変化について空間的に把握を行った。調査にあたっては、現地住民に調査補助を依頼し、通訳や調査協力者への交渉を担当してもらった。日本からは研究申請者に加え、東京大学の学生2名に同行してもらい、実測調査を主としたデータ収集の補助を担当してもらった。

調査2：ロキチヨギオでの調査(2019年度)

カクマ共和国・ロキチヨギオを対象に、地域リーダーおよび居住者に対して、ロキチヨギオに南スーダンからの難民が到来してから現在に至るまでのホストコミュニティとしての変化について明らかにした。国際機関(国連など)が整備した支援拠点用の居住地が、現在は地域の賃貸住宅へと転用されており、同居住区における現在に活用方法について居住者や管理者に対するインタビュー、実測調査を行った。また、町の行政官、商店主、居住者へのインタビューにより、1990年代から現在に至るまでの経済活動の変化、町そのものの変化について調査を行った。

## 【結論・考察】(400字程度)

カクマキャンプでは、難民による長期居住が進んでおり、一部の地区では親族の呼び寄せなどに伴う敷地の細分化や家屋の増築などにより過密化が進んでいる。過密化が進む中でセキュリティの強化などから各敷地を塙で囲う状況がみられた。それにより敷地の閉鎖化が進んでいる。また、難民キャンプでは、国際機関から最初に与えられるシェルター以外は全て居住者自身によって整備することが求められる。そのため、建材を購入したり自ら製作するなどして、増築を行っているほか、一部住宅を商店化したり、敷地を転売するなどの経済活動への転換も確認することができた。

ロキチョギオでは、難民受け入れを行っていた 1990 年代に国際機関が整備した職員用住宅団地が複数残っており、2006 年以降地域の賃貸住宅として活用されている。行政により管理されている地区と、地域住民組織により管理されている地区があり、マネージメントのあり方については優良な住宅ストックとして機能していることが確認された。